

プロローグ

「戦雲」いくさふむに包まれゆく島を歩く

反戦トウバリヤーマ「いくさふむ」 作／山里節子

いくさふむぬ まだん ばぐいでーくイそー

(戦雲が また 湧き出てくるよ)

あこーさ ぬぐりしや にぶみーん にばるぬ

(怖くて 恐ろしくて 眠ろうにも眠れない)

ゆむいくさ ならぬ

(憎い戦争 絶対にいやだ)

2016年の石垣島。霊峰・於茂登岳おもとだけの上空を暗雲が覆い始め、ざっと一雨来そうだった。「撮影を切り上げましょうね」。当時まだ青々としたゴルフ場だった自衛隊配備予定地の撮影

を中断しようとする私たちに、案内役の山里節子さんは言った。「こんな空を見ているとね……」重苦しい雲を撫なでるように指を動かす。「またあんな目に遭うんじゃないかって思ってしまうの。それを歌にしたりしてるんだけど」。そして彼女は大きく息を吸い、即興で歌い始めた。

石垣島の魂の歌「とうばらーま（とばるま、とうばりゃー）。彼女がその歌い手であることは知っていたが、雨がぱらつく野原でいきなり歌ってくれるとは。高齢の彼女の身体からだのどこにこんなパワーがあるのか、圧倒的なその声は山や草木を揺らし、大地と共鳴して迫ってくる。

節子さんから大事な母や妹を奪った戦争。「南西諸島防衛」を掲げて島に軍隊が入って来てから日常は激変した。当時8歳だった彼女が見たあの地獄が、またやって来るのでは。自衛隊がミサイル基地を造ったら、島はまたも戦場にされるのではないか。その強い危機感と怒りの叫びを歌い込む「とうばらーま」を、私は雷に打たれたように立ち尽くして聞いていた。

このシーンは2017年公開の映画『標的の島 風かたか』かじの一場面になっている。何が何でもこの島に戦争を持ち込ませるものか、と頑張る「いのちと暮らしを守るオバーたちの会」のみなさんはじめ、石垣島・宮古島で抵抗する人びとを取材し、それぞれの信念とパワーに圧

倒され、励まされた。南の島々をミサイル発射拠点にしようという国のたくらみなど、跳ね返せるのではないか。悲観的だった私も徐々にそう思い直し、猛然と映画を仕上げ、講演で全国に実情を伝えて回り、また「ノーモア沖繩戦 命どう宝の会」という団体を立ち上げ、あれから8年、映画に限らず島々を戦場にしないためにやれることは何でもやってきたつもりだ。

けれども結果は惨憺たるものだ。この撮影日記を読めば分かるように、あれから宮古島と奄美大島に自衛隊のミサイル基地は完成、先んじて「沿岸監視隊」を受け入れた与那国島にも、来ないはずだったミサイル部隊の配置が決まり、「全島避難」という言葉もささやかれている。そして2023年3月、ついに石垣島にも自衛隊基地が完成。ミサイルを積んだ不気味な軍用車両がぞろぞろと島を這って陸上自衛隊駐屯地に吸い込まれていった。節子さんは肺の病を抱えながらも声を振り絞って現場で歌い続けたが、ウタの呪力は、届かなかった。いや、先祖から脈々と受け継がれた八重山の反骨の遺伝子は、そう簡単に折れたりあきらめたりはしない。歌を持つ側の可能性を私はまだまだ信じている。けれども、2024年を迎えた今、島を覆う戦雲は膨れ上がり、振り払うどころかその濃さを増すばかりだ。

『標的の島 風かたか』の公開以降およそ6年、私は個人的に細々と取材撮影を続けてきた。

次の映画制作を決断し企画を立ち上げるまでは、カメラマンをお願いする予算はない。だからこれは撮っておかねば、という重大場面には何とかひとりで駆け付けカメラを回した。が、蓄積された映像はいつしか、沖縄県民が追い込まれていく場面ばかり、国防という名の国の圧力に抗しきれずに涙を流すようなシーンばかりになっていた。

頑張っても踏ん張っても、沖縄県と国との裁判はことごとく負け、辺野古の埋め立て土砂は投入され続け、ミサイルも戦車も島に入ってくる。敗北の場面を撮られるのは、現場の人びともつらい。カメラを回す方もつらく、見る側もつらい、そんな映画では制作費の回収も難しいだろう。抵抗の現場のダイナミズムを見せるだけのドキュメンタリーは成立しなれないと思えた。

視点を変えて沖縄戦の秘話から軍事化にブレーキをかける映画『沖縄スパイ戦史』（2018年公開、大矢英代はなよさんとの共同監督作品）の制作や『証言 沖縄スパイ戦史』（2020年、集英社新書）の執筆に没頭したのには、つらすぎる現場から離れたいという気持ちもあった。2013年からの5年間に4本のドキュメンタリー映画を次々に公開してきた私も、その後5年間は映画プロジェクトを立ち上げずにひたすら個人でオロオロと現場を回るだけで過ぎていった。

この本に収録した撮影日記は、まさにそんな葛藤の日々の記録でもある。国防を理由に島の

生活が捻^ねじ曲げられ、悲鳴を上げる人たちを撮影し話を聞く行為は、ひたすらつらく、自分の無力さを責める時間でもあった。高江も、辺野古の基地建設も止められない。自衛隊ミサイル基地の建設も止められない。ならば私のやってきた報道もドキュメンタリーも、何の役にも立たなかったということなのか？ そんなに敗北感にまみれて苦しい苦しいというのなら、もう廃業して家にこもっていいのでは？と自分に言ってみる。それでも迷いながらノコノコと現場に通っては身もだえし、立ちすくんで、冷静な撮影すらできない自分がいる。「何がしたいの？ まだ何かできると自分を買いかぶっているのか？」と内なる冷たい声が響く。

転機は2023年2月のある上映会だった。私の過去作品をすべて自主上映して下さっている長野の団体が、インターネットサイト「マガジン9」で連載している沖繩撮影日記にすでにあがっている動画5、6本を見る会を催して下さった。新作が出せていなくて申し訳ない気持ちで参加したのだが、1時間ほど見終わると、五臓六腑^{ごぞうろつぷ}が締め上げられたような耐え難い苦痛に襲われた。もちろん、自分で編集したのだから熟知した中身なのだが、まとめて見ると状況の悪化のすさまじさが際立つ。すると会場でも異変が起きていた。「まさか沖繩がこんなことになっているとは……」とマイクを持った参加者が次々と涙を流し、嗚咽^{おえつ}し言葉を失う人もいた。会場は衝撃に沈んでしまった。

私は、目からうろこが落ちる思いがした。この間、ひとり撮影してきた映像は、つなげたらここまで、大の大人を次々に泣かせてしまうほどの破壊力を持つのか。実際、国の平和が瓦解するような重要な出来事が、その情報が、全国に伝わっていない。沖縄だけの話にされたまま、人びとの手の届くところに映像がない。誰かがそれを置きに行かなければならないのだ。なのに、その映像を持っている私はいったい何をしているのか。

沖縄報道生活30年の自分の敗北感とか、次作映画のクオリティうんぬん云々は、もはやどうでもいい。ただひたすらに大事な動きを世の中に伝える、その地を這うような仕事から逃げるな、と自分に活を入れ直した。その後、私はこの時の素材をベースに、新作の番外編として「スピントフ」(45分)を編集、無料で公開すると宣言し、配給会社東風さんに頼み込んで上映会の窓口になっていただいた。すると、無料ということもあって瞬く間に全国に広がり、上映会は1000件を超えた。その、「本編」より先に出た「番外編」に引つ張られる形で「本編」を2024年3月に公開することが決まった。

この本には、2017年以降、湧き出す戦雲に抵抗する人びとがどんな時を刻んできたのか

が詰まっている。そして、ひとりでカメラを持ってさまよった日々のやり場のない思いも、行間に落ちていく。もし読者のあなたが、あの時私と一緒に現場でそれを見ていてくれたら。隣にいてくれたら、行き場のない思いはあなたに拾ってもらえたのだろう。今からでも遅くはない、この本で私の見てきたものを追体験していただき、共に目撃者になり、今という歴史を背負う当事者になってもえたら。そう考えると、何か温かいエネルギーが湧いてくる。

映画とは別に、本にまとめる意味。それは、今からでも読者を巻き込み、みなさんの力も合わせて戦雲を蹴散らすエネルギーを増幅させたい、共に雲間の光を押し広げていきたいという願いに尽きる。走りながら現場でぐるぐると考えたことを書きつけた日記は、読み返せば我ながら味くーたー（濃い味）で読みづらい文章だが、伴走者となつてどうか最後までお付き合いいただければ幸いである。

本書の内容は「マガジン9」(<https://mag9.jp/>)に連載された「三上智恵の沖縄〈辺野古・高江〉撮影日記」(2017年1月〜2023年3月)を抜粋加筆したものです。連載時に掲載された動画リポートは同サイト上で視聴可能です。各章の冒頭に、動画にアクセスできるQRコードを付しましたので、スマートフォンなどで読み取ってご視聴ください。本文中の情報、肩書きなどは基本的に掲載時点のもです。